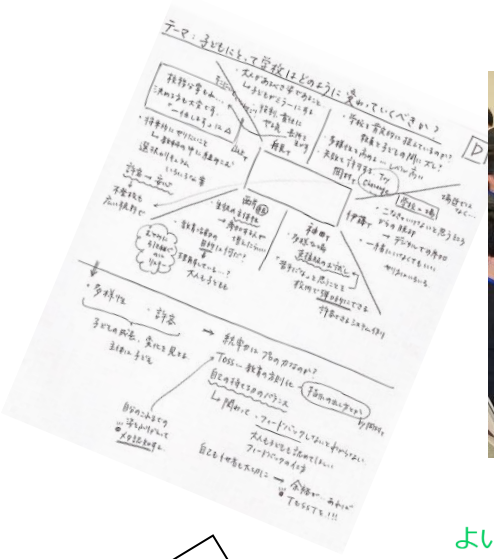
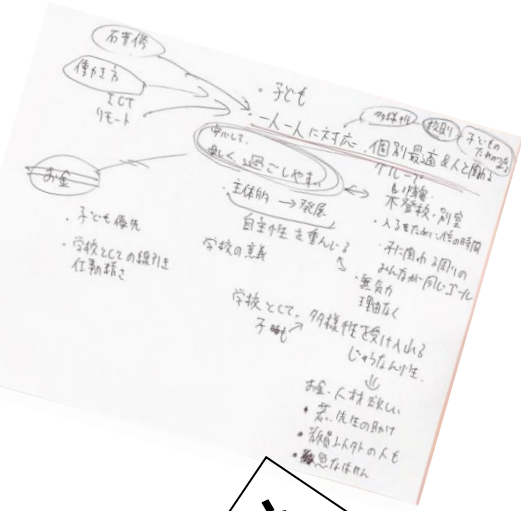
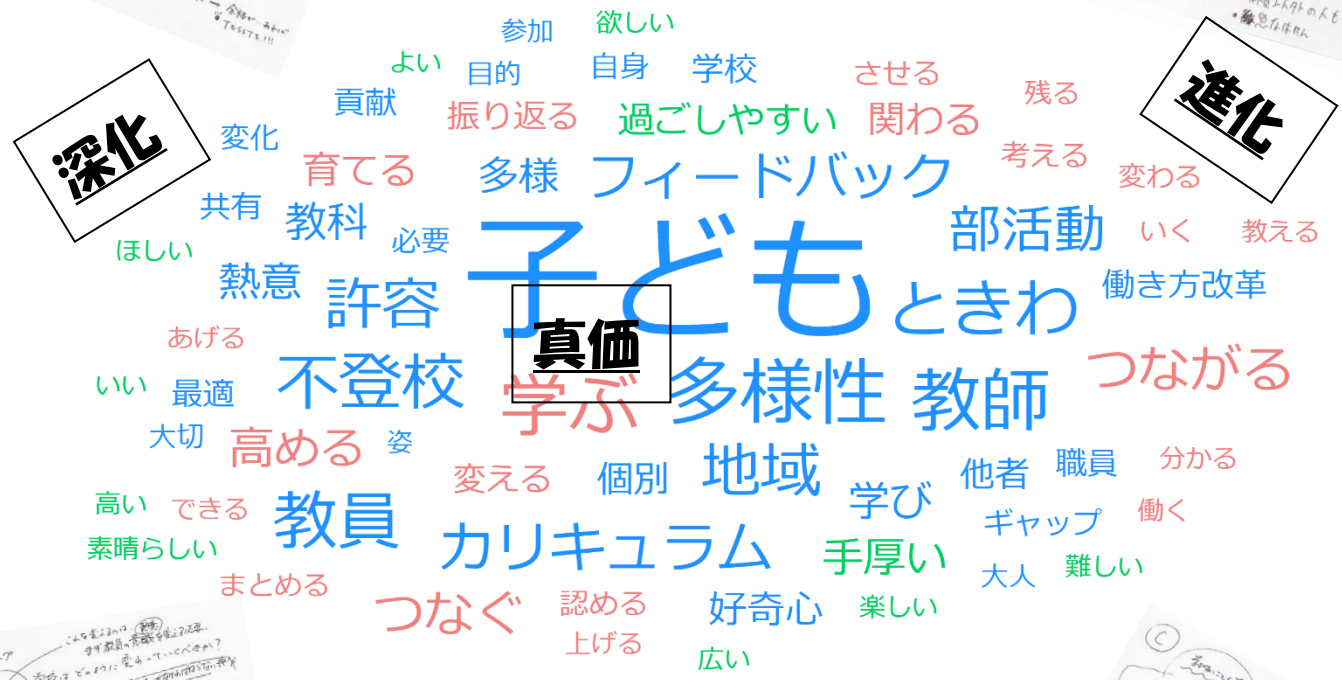
ときわ会 150 周年記念事業
「志」の継承　未来へ　～進化、深化し続けるときわ会の真価を問う～

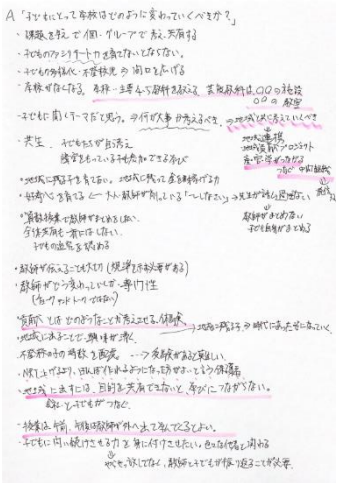
事前活動（４）
「自らの真価を問う問い（子どもにとって学校はどのように変わっていくべきか？）」をテーマに話し合い、交流しました。

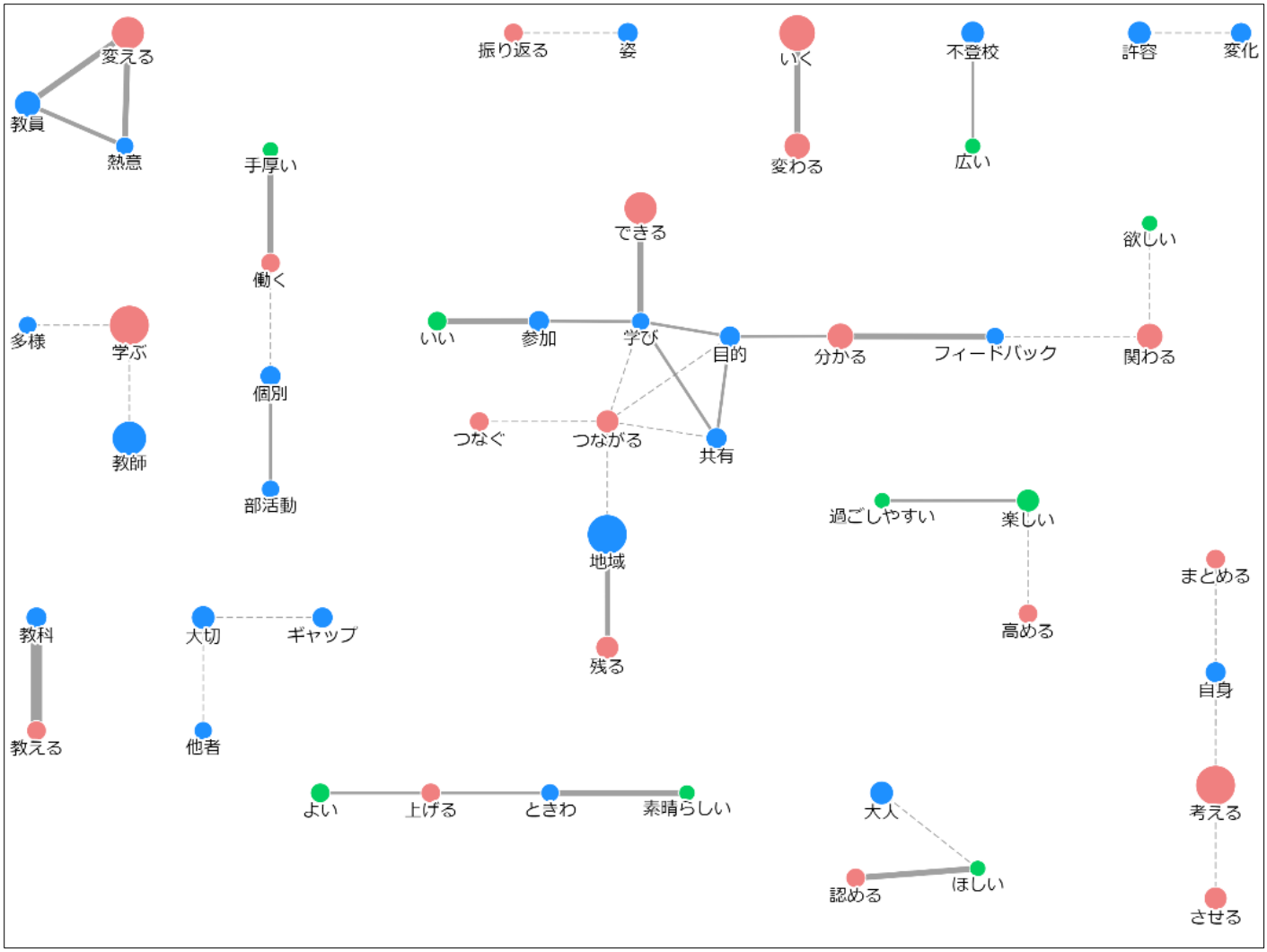
in　　上越支部　秋季全員集会（令和４年 11 月 26 日）

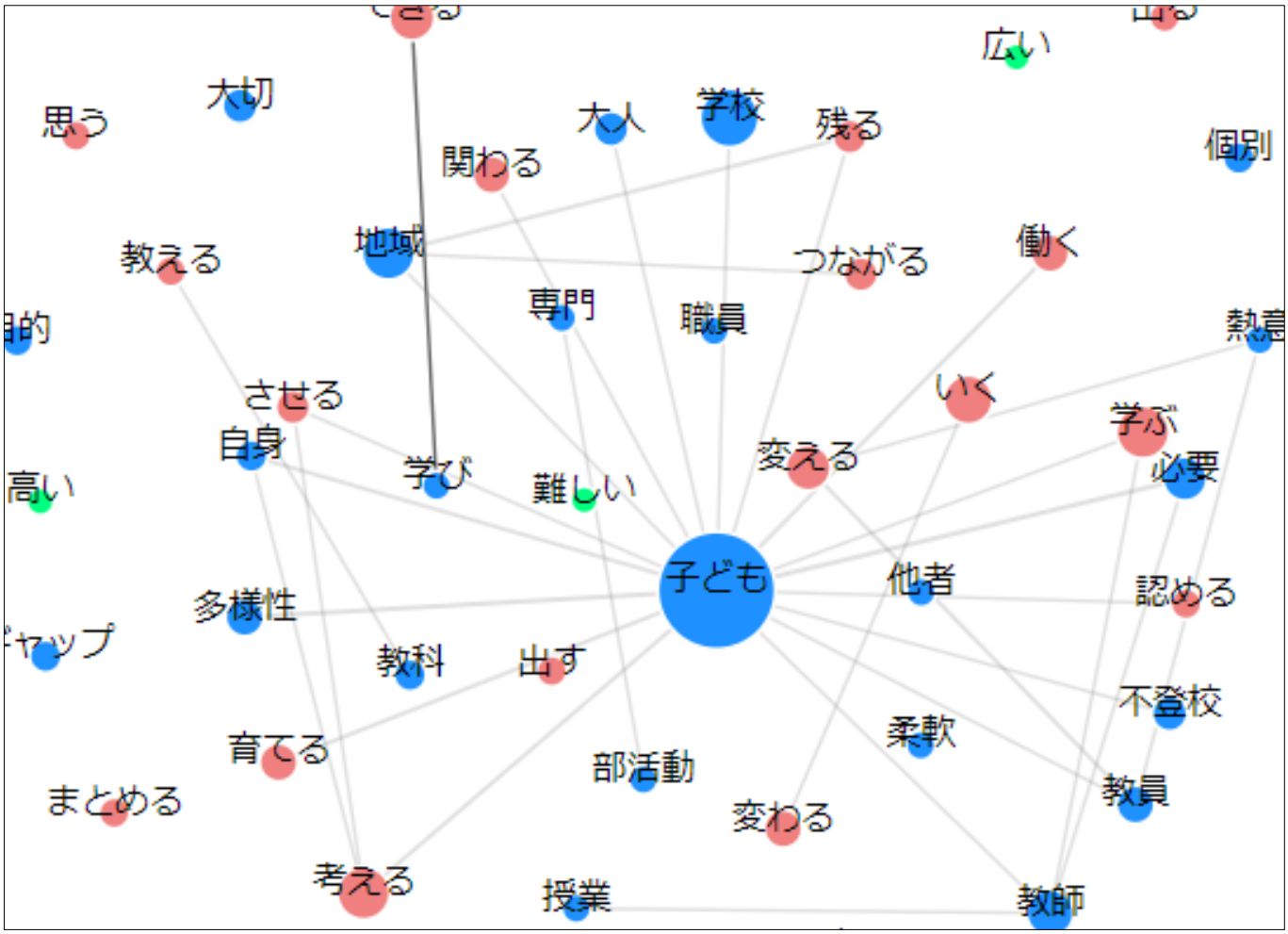









変える
教員
熱意
振り返る
姿
いく
変わる
不登校
広い
許容
変化
手厚い
働く
個別
部活動
できる
欲しい
多様
学ぶ
教師
いい
参加
学び
目的
分かる
フィードバック
関わる
つなぐ
つながる
共有
過ごしやすい
楽しい
地域
残る
高める
まとめる
教科
大切
ギャップ
教える
他者
自身
よい
上げる
ときわ
素晴らしい
大人
考える
認める
ほしい
させる


広い
思う
大切
大人
学校
残る
個別
関わる
教える
地域
つながる
働く
専門
職員
熱意
させる
いく
学ぶ
自身
学び
変える
必要
高い
難しい
子ども
他者
認める
多様性
教科
出す
不登校
育てる
柔軟
部活動
教員
まとめる
変わる
考える
授業
教師

○「子どもにとって」は根幹
○「子どもにとって」を変えるには、まず教員の意識（熱意）を変える必要がある。
○変わっていかなければならない部分と残していかなければならない部分。どちらも大切。
○状況に応じて柔軟に
○YouTube など、社会が変わる。それに伴う変化をしなければ。去年と今年とでも状況がちがう。
○教員の意識を変えなければ。働き方改革。例えば卒業式や体育祭の練習はあんなにいる？精査が必要。当たり前の再考。
○学校は世間においついていない。まだそんなことやっているの？
○10 年先はどうなっているか分からない時代。正解は分からない。
○管理職の個性。教員に変えようとする熱意があるか。必要な変化を恐れない職員集団に。
○変えることを嫌がる職員もいる。
○生きる力。子ども自身に考えさせる力を育てたい。生活の中で子どもが学ぶことが必要。
○こういうことを変えたいと、考えを出し合って考える場の設定。教員同士で声が出せる環境が自然とできている状態がベスト。
○ときわ会のように、本音で言い合える環境が素晴らしい。それぞれの学校でときわ会の人たちが声を上げる。
○子ども一人一人に対応（研修、働き方 ICT、リモート、多様性、校則）、個別最適＆人と関わる。
○子どもが安心して楽しく過ごしやすい。主体的で発展していく。自主性を重んじることが学校の意義。しかし、グループ化や障害、不登校・別室登校。学校として子どもの多様性を受け入れる柔軟性が必要。子どもに関わる周りのみんなが同じゴールだが、そのためにお金や人材が欲しい。
○課題を与えて個・グループで考え、共有する。
○子どものファシリテート力を育てないとならない。
○子どもの多様性・不登校。間口を広げる。
○学校がなくなる。学校は主要４・５教科を教える。芸能教科は地域で教える。
○子どもに聞くテーマ。何が大事か考えるべき。地域とともに考えていくべき。地域連携、地域貢献プロジェクト、産官学がつながる、つなぐ中間組織。それを発信していく。
○共生。子どもたちが自ら考え、障害をもっている子も参加できる学び。
○地域に残る子どもを育てたい。地域に残って金を稼げる力。
○好奇心を育てる。大人・教師が好奇心を削っている。先生が話しすぎない。教師がまとめない。子ども自身がまとめる。
○算数授業で教師がまとめをしない。全体共有も一斉にはしない。子どもの追究を認める。
○教師が伝えることも大切（規準を示す必要がある）
○教師がどう変わっていくか・専門性（チョーク＆トークではない）
○貢献をはどのようなことか考えさせる体験。
○地域に出ることで興味がわく。地域に残る子ども。時代にあった姿になっていく。
○不登校の子どもの時数を配慮。受験があると難しい。
○ＮＲＴを上げるより、田んぼを作れるようになった方がよいという保護者。
○地域に出すには、目的を共有できないと、学びにつながらない。会社と子どもがつなぐ。
○授業は午前、午後は教師が外へ出て学んでくるとよい。
○子どもに問い続けさせる力を身に付させたい。様々な他者と関わる。やらせっぱなしでなく、教師と子どもが振り返ることが必要。
○大人があるべき姿であること。子どもがミラーにする。役割・責任に。やる気、長所を生かす。

〇校務分掌も決める方も大変。「一任します」は△。
〇将来的にやりたいことを教科の中に組み込む。選択カリキュラムなどいろいろな案。許容することが安心につながる。不登校も広い視野で。
〇生徒の主体性。参加する人が増えたらいい。教育活動の目的は何？きちんと理解しているのか？大人も子どもも？目的も分からずに引き継ぐのは危険。
〇多様な場。「苦手だな」と思うことを校内で弾力的にできる。許容できるシステム作り。
〇学校はこなきゃいけないと思うところからの脱却。デジタルでの参加。一緒にいなくてもいい。やり方はいろいろ。
〇学校を肯定的に捉えているのか？教員と子どもの間にズレ？多様性を高める。レベル高い。失敗を許容する。Try＆challenge。
〇多様性と許容は子どもの成長・変化をみとる。主体は子ども。
〇統率力はプロの力なのか？Toss（教育の法則化、指示の出し方など）。自分のこれまでの姿を振り返ってメタ認知する。自己のもてる力のバランス。関わって、フィードバックしないと分からない。大人も子どもも認めてほしい。フィードバックの仕方。
〇自己も他者も大切に。余裕があれば。
〇子どもの学びたいことを学ぶと教師の学ばせたいことを学ばせたいことにギャップがある。そのギャップを減らすことが大切。勉強をして楽しい、役に立つといった思いで自己肯定感を高める。
〇学びたいことは多様化している。学びたいことは本来の意欲。
〇子どものために時間をいくらでも使ってあげたい。できることを全てやってあげたい。しかし世の中の流れと自分の思いのギャップ。
〇働き方改革は本当に子どものためになっているのか？
〇子どもへの手厚さと働き方のジレンマ。
〇なんで子どもは学校に来るのか？子ども自身はどう考えているのか？行きたい理由のある学校、行って楽しいことがある学校。ワクワク、個別最適な学校。自分でカリキュラムを組む。
〇部活動は変わりどき。地域への移行。専門外の部活動を行いたくない。個別専門得意な部活動のみ設置。